



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## #不登校は不幸じゃない

不登校は問題行動ではなく、誰にでも起こること。こんなふうに、校長の私が言うと、不登校を容認している、無責任極まりない姿勢だと非難されるかもしれない。しかし、実際問題として、そのような状況にある子どもがいて苦しんでいるとしたら、その子に寄り添うかたちで共に歩むことから始めないと、当の本人だけでなく、家族や友人、先生など、身近な人たちがそれぞれ心を痛めることになる。大切なのは、学校に行けるかどうかというより、一人ひとりが自分のことを受けとめてもらっていると安心できるかどうかではないだろうか。

ずいぶん前のこと、不登校傾向にある子を担任したことがあった。1学期は何とか登校していたが、2学期になってから行き渋りがめだちはじめ、冬を迎えるころになるととんと姿を見せなくなった。なんとか登校できるようにしたいと、毎週土曜の午後に、仲のよい近所の子を誘って家庭訪問し、外に連れ出しみんなで遊んだ。実に楽しかった。そして、勉強はというと、算数を中心に学校でしているところをノートにまとめたり、練習したりするという約束をし、家庭訪問したときに私が確かめることにしていた。ところが、実際は充分に取り組みせず、本人も私も悩み、家族や友だちは心配した。

平日、みんなが学校で勉強しているところを、家庭で一人取り組むというのはなかなかできることではない。わかっているはずなのに、本人はそうするのだと強く言うのである。今でこそ、そこまで追い詰めるような場をこちらがつくってしまったのではないかと気づくのだが、当時は「とにかく担任であるこの自分がさせなければならない」と思い詰めていたのである。

ある日、何もできていない真っ白のノートを広げて、ぼろりぼろりと涙を流し、じっと固まってしまった。私もどう声をかけてやればいいのか途方に暮れ、うつむいているのをみつめていた。その息の詰まるような場を解き放ってくれたのは、近所の子の一言だった。「ぼくも、ここんところ、わからへんかったからできひんかった。できひんでも学校行ってるで。今は、ちょっとわかるようになったけど。」

「ドンマイ、悔やむな、悩むな、気にするな・・・」いろいろな思いを込めた励ましのことばに代わって出てきた一言だったのだろう。今度はその子が先生代わりになって、「あのな、あのな」と説明したり、「やってみ、そうそう」と簡単なことからさせてみたりするうち、涙は止まり、外遊びの時間となった。結局、その問題場面は近所の子も本人も、計算はできるけれど、肝心の問題は読み解けるようにはならなかった。が、私たちは「これは実にややこしい問題だ」という妙な一体感を味わうことができたのである。以来、彼には少しずつだが、わからないとか、できないとかの気持ちが出せるようになり、家族も私も、真っ白なノートでもうるさく言わず待てるようになっていった。そして3学期の後半には、教室に姿を見せるようになったのである。

学校に行きにくい子、学校になじめない子に出会うたびに、「できひんかってても学校行ってるで」という一言とともに、「これは実にややこしい問題だ」というあの妙な一体感を思い出している。